

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
ことは	瑠子 清吉	かげろう	由美子 美枝子のぞみ 風舎 芳春	俳翁 清吉	芳春 道を		ことは 稀香 ほのる	由美子					暦文	きいち ほのる 鶴城 朝香
鮑焼く海女の小声の艶話 小声ほど気になるものはありません。	赤き袴のふはりとかくぐる茅の輪かな 茅の輪の薄緑と巫女の袴の赤が、いかにも美しい。赤と緑の対比、中七の表現が見事。	五月闇林のカフェに昼灯り 昼なお暗い雲の下の灯りに暖かみとコーヒーの香りを感じる。	田の神の輪投げ遊びか植田雨 願っている。鮮やかに景が浮かぶ、清々しく、好ましい余韻が残る。稲作に欠かせない田植え後の雨を「神の輪投げ遊び」と喩えたのは秀逸。	朝虹や射す日は雨の洗いたて 射す日が雨の洗い立てとは巧い詠みぶりです。下五の措辞が見事。	青梅の青さに惚れることがあり 鬱陶しい季節、青梅の青臭さに惹かれる気分わかります。青梅の青、私も惚れます。	南無阿弥と唱え地蜂にフマキラー 鬱陶しい季節、青梅の青臭さに惹かれる気分わかります。青梅の青、私も惚れます。	浜風や身幅に余る宿浴衣 爽やかな色気が素敵な一句。身幅に合わぬの表現で、旅先で海を眺めている人とわかるお上手な句です。中七の措辞に浴衣の人物が浮かび上がってくる。	闇夜ありバナナ突き刺し武器とする ユニーク！無条件でこういう句が好きです。	二歩三歩蜥蜴這ふなり陰日なた 山帰り路上ライブの夏夕べ	冷し酒中途半端に酔ひにけり 梅雨に入るかすれた音のジャズ喫茶	銀の粒離れ集まる蓮浮葉 蓮の葉に真珠の様な水滴、綺麗。	母叱る夢の涙や明易し 私も認知の母を介護した経験あり。秀逸な季語に「夢の涙」が、よりせつない。母を想う作者の優しさが涙を誘う、母の夢をもつと見ていたかった。上五と中七の悲しさに下五の季語の輪旋がよい。		
新暦文	丸山マズミ	小林京子	本橋稀香	ほのる	網野月を	池田瑠子	森美枝子	望月のぞみ	石関六弦	木村るみ子	檜鼻ことは	古賀由美子	木村隆夫	荒一葉

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
			俳翁 六弦 マスミ 芳春		のぞみ		暦文		隆夫 るみ子 稀香 マスミ	粉雪 正信 鶴城 舎				美枝子 一葉 正信 珪子 翔太 春香
神妙に蟄居の構へ梅雨に入る	丸々と入梅鰯筈にあり	知床の海よ鎮めよ山瀬風くる	警策の動く気配や仏法僧 <small>座禪の張りつめた空間を詠んで警策と仏法僧の取り合わせが成功している。静と動の緊張感とともに季語の選択が効いている。張り詰めた静けさの中で座禪。警策を頂くのは次は私かな。折から霊鳥仏法僧の声が聞こえて来た。座禪道場の空気を伝える上五中七が秀逸。</small>	辣蕪の白皮剥くや孫いとし	亀がいる睡蓮が咲くそれでいい	手花火や隣家は子らのはしやぎ声	たえまなく揺るる終活えごの花 <small>花言葉は壮大。いつまでもお元気で。</small>	紫陽花の折り紙覚えし頃遠く	夏潮やふくらむ安房の真帆片帆 <small>夏の海を行き交う船が力強く表現されている。行き交う船舶の力強さが表現されている。真帆片帆のリズムの良さ、清々しい帆船の様子か伝わる。夏の安房の海に乗り出したヨット。帆の向きを風に合わせて変える、それがなんとも楽しい。穏やかで広大な海の景が目には浮かぶ。</small>	ひとつづつあとはじやんけんさくらんぼ <small>可愛いらしさが全部ひらがなにしたことで、さらに可愛らしくなった。平仮名書きが、仲良し兄妹の気持ちをよく表している。様子が手に取るように見える、ひらがな表記が成功した。軽快で、遊び心も好ましい句である。</small>	余花明かり仙人暮らす一軒家	紫陽花の主なき庭にたわわなり	少年に男の匂ひ夏帽子 <small>夏は急に成長する季節季語の幹旋が良い。ひと夏を越した少年の成長が「男の匂ひ」で上手く表現できた。母親の実感か、奥の深い句。いつの間にか大人に、思春期前の初々しさ。変声期を過ぎると男の匂いを放つのかも知れない。感性がすばらしい。嗅覚と季語の結びつきに意外性と艶っぽさがあって良い。</small>	
山中いちい	野田静香	村杉清吉	青木鶴城	寒立馬	奥山粉雪	かげろう	渋谷きいち	石田春香	吉沢美佐枝	俳翁	保坂翔太	霜里	後記朝香	後藤允孝

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
月を 道を	きいち 月を			美佐枝 六弦香 喜夫香 朝俊香 春香	珪子 俊晴	美枝子 允孝夫 喜夫香	清吉 静香	美佐枝 ほのる 鶴城 かげろう 道を		美佐枝 寒立馬				翔太
どくだみや平家の裔の小商ひ 俳味が横溢している。どくだみを上手に詠まれている。	京豆腐よく売れる日や夕薄暑 生活句です。京都の気候と風土が育んだ豆腐なら、季語の薄暑に負けない。見事な	朝からの河鹿で目覚む旅の宿	紫陽花は雨のエキスで虹色に	ででむしや一両列車を待つホーム てたものでないなあ。季語の平仮名と景「一両列車」の取り合わせが良	バーゲンの白のTシャツ更衣 単純明快、白のTシャツ大好きです。素敵じやあないですか。	嘘もまたときに労り枇杷を剥く す。日常動作に隠された感情の奥行きが詠まれている。	黒髪や宵に紅さす花火舟 赤と緑の対比、中七の表現が見事。すべてが美しい。	初夏やフランス窓を開けて海 おしやれな句、テラスからの海の眺めの気持ち良さ。初夏、フランス窓、海、これ以上何を求める、さぞや美味しい食事であつたらう。初夏の旅先のホテルからのオーシャンビューの絶景が見えるよう。おしやれに詠まれています。	水無月や千百号の「水明誌」	入梅鰯ほどよくメてあてに夜 酔締めにした句の入梅鰯が美味まちがいなし、晩酌が待ち遠しい。句の好物であろうか。よだれが出る。粹だ。	梅雨晴やわざわい少し手で払い	君逝きて君を知らずや白牡丹	そよ風と光の海の梅雨晴間	鰻喰ふことは信心成田山 成田山新勝寺の参道はうなぎ屋が多い。鰻を信心に結びつけたところが面白い。
森美枝子	池田珪子	石関六弦	望月のぞみ	檜鼻ことは	木村るみ子	荒一葉	木村隆夫	古賀由美子	宮崎チアキ	岡田芳春	持永喜夫	日高道を	井口俊晴	染谷正信

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46
風舎	由美子 六弦 月を	允孝 朝香	静香 翔太	俳翁 ことは 正信		稀香 允孝	マスミ 俊晴	隆夫	るみ子					粉雪 のぞみ
梅雨入や考え事をしたくなり アウトドアの活動がし難くなる季、精神活動にギアチェンジする心情が好ましい。	理不尽な日々 に備えよ我が梅酒	葉の先をこぼるる真珠梅雨晴間	源平のほたる恋して争はず	夏夕べ油の匂ふ町工場	梅雨晴れ間互い違いに傘を干す	坊主頭に旋毛がふたつ蝸牛	五月雨の京に番傘蛇の目傘	薫風の身の内を過ぎ生氣満つ	最上下る舟歌朗朗紅の花	暮れなずむ空を切り裂く蚊食鳥	さざ波の走り来植田初初し	うすつぺらき匙上手く抜くかき氷	青嵐跳ね返しみる頭首工	六月のくるぶし浸る草の波
奥山粉雪	石田春香	渋谷きいち	俳翁	吉沢美佐枝	霜里	保坂翔太	後藤允孝	後記朝香	丸山マスミ	新暦文	本橋稀香	小林京子	網野月を	ほのる

六月の草とはそんな感じだと思いきこしました。くるぶし浸る、リアルに季節感を表しています。

			72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	水明インターネット句会（選句・選評） 令和四年六月	
			寒立馬	隆夫 きいち				一葉 喜夫 寒立馬		一葉	曆文	粉雪 るみ子 かげろう				
			生き急ぎいつしか独り蚊帳の外	刈草の干涸ぶ川辺芳しき	形代と共に茅の輪をくぐりをり	黄昏の故山眺める暮	嫁入りの舟に卯の花腐しかな	果たされぬまたの約束花藻咲く	梅雨の晴蝙蝠傘を杖にして	打水や九尺二間の扱りどころ	帆船の余生悠々風薫る	白南風やミサ曲聞こゆ石畳	航跡の先に影なし五月間	木漏れ日や見上ぐ額に青時雨		
			合点がいく。じっくり話し込みたい感じを受けた。	刈草が干からび芳香を放つ様が丁寧に詠まれている。干し草の乾いた甘い匂いがたまりません。				果たされぬ約束への寂寥と時の流れへの後悔が花藻に揺れる。今度またねの約束は流れの中で消えたりするが、ふと、思い出し会いに行く心情が花藻咲くで完結か。季語の情感がいい。昭和の女のドラマが浮かぶ。		狭いながらのわが家での丁寧な暮らし向きが見える。	最高の人生、余生はこうありたいですね。	詠んだあと、とても爽やかな気分になりました。夏風に流れるミサの爽やかさ。気持ちのよい風を感じる日曜日朝の切り取り方が素敵。				
			持永喜夫	宮崎チアキ	岡田芳春	井口俊晴	日高道を	山中いちい	染谷正信	青木鶴城	野田静香	村杉清吉	寒立馬	かげろう		